

忙中感あり

vol.82

金本 知憲様

今回は、元阪神タイガース監督の金本知憲様をお迎えいたしました。

お客様



藤尾社長（以下藤尾）本日はお忙しい中お時間をいただき、ありがとうございます。

金本知憲様（以下金本）よろしくお願ひします。

インタビュアー 藤尾社長との出会い

と第一印象についてお聞かせいただけますか。

金本 出会いは、大和ハウスのゴルフコンペで、樋口さん（最高顧問）から紹

介していただきました。藤尾さんはゴルフが大変お上手で、打つ時にご自分の動きのチェックを口で発しながらされるので、こういうゴルファーの方がいらっしゃるのだと。それが一番強い第一印象でした。（笑）

インタビュアー 社長は金本様の第一印象はいかがでしたか。

藤尾 お会いできて光栄した。樋口さんから「金本さんと一緒に回ろう」と

言っていたいた時には大変嬉しかったです。その頃金本さんはゴルフを始めたばかりだったようですが、こなれがもの凄く飛んだんですよ。（笑）ゴーッと音を立てるくらい凄かつた。それから、しばらくして再び茨木カンツリード金本さんと回らせていただき時に、キヤディさんが「右はOBですよ、左はそこからOBですよ」と教えてくれたら、金本さんが「後ろはどうなの？」と。（笑）

そんな感じで皆を和ませながら、気

を遣われる方ですね。そしてとにかく豪快です。

当社のコンペに参加していただいた時には、コンペが終わってからも練習されていました。もちろん始まる前も練習する。凄いなと思いました。私は始まる前も終わってからも練習するパワーハーはない。さすが金本さんやな、と

いました。それらをトータルで考えると、一言で「凄い」に尽きます。その凄さが抜群の存在感を誇るオーラとなつて、たくさんの人を惹きつけるのだと思います。

金本 その頃はゴルフを始めてまだ1年くらいだったので、野球と同じように、上手くなるには練習しかないな、と夢中になっていました。

藤尾 本当に熱心ですよね。それからすぐにお上手になりましたよね。

金本 あの時、僕はベストスコア（初80台）が出そうになっていて、今日はベストがかかるつてないので最後までやらせてくださいと言つてやつたものの、焦つて外すだけ外して結局90でした。樋口さんと藤尾さんが「見てない見てない。今日は80台だ」と言つてくださったのを覚えてています。（笑）

インタビュアー ゴルフは定期的にされていますか。

金本 そうですね。冬の間はあまりしませんが、暖かくなつたら、そろそろ始めようかなと思っています。

インタビュアー 「金本塾」も大盛況とお聞きしております。藤尾社長は11月に参加されましたか、いかがでしたか。

藤尾 その時も大変気を遣つていただき、串家の物語のことを何度もお話しの中に入れて頂き嬉しかつたです。また京大教授の藤井聰さんとの対談が面白かったです。藤井教授は何でも率直にご意見をおっしゃる方で、とても楽しい時間でした。

金本 「金本塾」にご協力いただきありがとうございました。



金本 カープの時の三村敏行監督です。2軍で2年間、1軍で5年間、合計7年間を三村さんのもとで学びました。だから、野球の基本から取り組む姿勢など、全ては三村イズムで育ちました。

藤尾 やはり環境は大事ですね。ここら辺(天満)は商店街ですから、食べ物屋とか八百屋さん、花屋さんなど、生活する上において、百貨店を横に倒したように、商店街は何でもあります。私はそういう環境で育ちました。実家の前は工務店で設計をするお兄さんがいたし、とにかく商売人に囲まれた環境でした。

※ここで熱狂的な金本さんのファンである社員(井内さん)が参加

藤尾 これまで、一番色々なことを学んだなという監督はいらっしゃいますか。

金本 兄貴は、僕がやると兄貴も真似してやっていました。(笑)

藤尾 私も全く一緒です。四人兄弟の末っ子です。

金本 そうなのですか。

藤尾 私の幼少期は金本さんと反対で、身体が弱く、すぐに熱が出たり耳も悪かったので、親は私を大事にしてくれていました。まだ昭和三十年で戦後のにおいてがする時代でもありました。そ

したね。(笑)

藤尾 朝日放送(ABC)の脇阪相談役からも「金本塾」のお話をいただいた時、すぐに承知しました。

インタビュー コロナのためオンラインでの開催もあったようですが、皆さんリアルイベントを楽しみにされてると思います。

金本 実際、今もソーシャルディスタンスを取り、しっかりと感染対策しながら開催しています。二日前も和泉市のほうに行つきました。

インタビュー 直接ファンの方とお話しするのはお好きですか。

金本 そうですね。会場に行くまでは

「何を喋ろうかな、どんな人達が集まっているのかな」と想像しています。あまり真面目な話ばかりだと退屈するでしょうし。僕のモットーは、「真面目な話を楽しくする」というのが、一番耳に入りやすいのかなと思っています。

藤尾 「真面目な話を楽しくする」、良い言葉ですね。

金本 僕は四人兄弟の末っ子だったのでも、親にあまり構われずにはっとかれたタイプです。どちらかというと、わんぱく坊主でしたね。勉強は嫌いでもないけど好きでもない。体育は好きで



PROFILE 金本 知憲 (かねもと ともあき)

- 1968年 広島県生まれ
1987年 広島県広陵高校卒業
1991年 東北福祉大学卒業
1991年 広島東洋カープ入団
2000年 プロ野球史上7人目のトリプルスリー(3割、30本塁打、30盗塁)を達成
2003年 阪神タイガースに移籍
2005年 シーズンMVP獲得
2006年 904試合連続フルイニング出場の世界記録達成
2010年 1492連続試合フルイニング出場でギネス記録認定
2012年 現役引退
2016年～2018年 阪神タイガース監督
2018年 野球殿堂入り

選手を獲得して皆が驚いていましたが、今あれだけの選手になったので、さすがの眼力だと思いました。

金本 いやあ、眼力というよりは、僕が監督だった時はチームにレギュラー野手がいなかつたので、野手を育てていかないといけない時期でした。

ピッチャ―は外国人選手で補いやすいのですが、バッターの外国人選手はなかなか難しいので、その辺りを生え抜きの選手で育成する必要がありました。スカウトとか前評判にとらわれるところなく、自分なりのドラフトをしたつもりです。



藤尾 三村イズムとは、どんなイズムですか。

金本 広島の緻密な野球といいますか、野球ひとつにしてもポジショニングにしても、野球の一から十までを状況判断しながら動いていくような感じです。

その場その場で、今自分が何をすべきかを判断して行動する。野球でいえば、点差、イニング、アウトカウント、ストライクカウント、ボールカウント、

この状況において何をすべきかを本当に細かく学びます。まずタイガースで

は有り得ないくらい。

一同 (笑)

井内 今年の阪神はどうでしょうか。

金本 戰力は十分ありますから、優勝しないといけません。

金本 もちろんそうですね。ルーキーにしては振る力はついていますし、身体の強さはものすごく感じます。顔つきもいいですね。楽しみな選手です。

インタビュー ルーキーの佐藤選手が金本さんと同じ左バッターですが、注目されていますか。

藤尾 やっぱりセンスなんでしょうね。

金本 大学時代は、決勝の時に手首を痛めさせて、何とか頑張って決勝タイマーを打ちましたが、あの時は折れているとは思わなかつたです。

藤尾 しかし本当に凄いですね。球場がおつ一つと総立ちをしたシーンで

すよね。

金本 メンタルコントロールですよね。

インタビュー 金本さんはこれまで広島、仙台、関西にお住まいなってきて、関西での生活も長いと思いますが、大阪の魅力は何だと思いますか。

金本 大阪の魅力は、人柄としては、人類皆兄弟のような感じですよね。笑

昨日の友は今日の友、昨日の敵は今日の友、みたいな。そういう親しみや

さはすごく感じます。広島も、少し似たところはあります。

金本 チーム力には、やはり人材が大切だと思います。野球でも良い選手がないとなかなか勝てません。

選手同士が厳しくなることが大切ではないのかと思います。

金本 今、ジエネレーションギャップとか言われていますが、野球の技術にギャップはないと思います。野球への取り組み方や練習方法については多様になつた部分もあると思うが、選手を育てるという点については、語弊があるかもしれません、所詮センスというところは正直あります。(笑)

金本 あれは本当にまぐれです。(笑)

金本 そうですね。個々の社員さんの役割としては、自分が会社にとって今何をすべきかを的確に判断して、その責任を果たすことではないでしょうか。

藤尾 組織の中で与えられている役割を明確に理解して、それ遂行していくということですね。

インタビュー 金本さんの本を拝見しましたら、「傷をなめあうチームではなくて、刺激しあうチームが伸びる」という風に書かれていました。

金本 はい。僕が選手時代の時にも、慰めて欲しい場面で慰められると気持ち悪いと思うことがありました。今の時代に限らず、傷をなめあうとか、なあになるというか、そういう雰囲気が出始めると、強いチームだとは僕は思わなかつたし、そういう場面でも

金本 はい。僕が選手時代の時にも、慰めて欲しい場面で慰められると気持ち悪いと思うことがありました。今の時代に限らず、傷をなめあうとか、なあになるというか、そういう雰囲気が出始めると、強いチームだとは僕は思わなかつたし、そういう場面でも

金本 今、ジエネレーションギャップとか言われていますが、野球の技術にギャップはないと思います。野球への取り組み方や練習方法については多様になつた部分もあると思うが、選手を育てるという点については、語弊があるかもしれません、所詮センスというところは正直あります。(笑)

金本 あれは本当にまぐれです。(笑)

金本 やっぱりセンスなんでしょうね。ただ金本さんは、ファンとしてみていて、気持ちでは負けない方だったと思います。気持ちで負けてて試合に勝つたアスリートはいないと私は思います。そういう意味で金本さんのあの骨折しながらもヒットを打つた場面は目に焼き付いています。片手で打つたあのシーンはいつまでも私達の脳裏に残っています。やはり「負けない」という気持ちが金本さんは誰よりも強いのだと思います。

金本 メンタルコントロールですよね。僕はもともと横着者で、何やっても三日坊主で、何をやつても続かない、本当にそんなタイプなんです。ただ、野球でプロになつて活躍する、ということが絶対プロで一流になるんだというメンタルが僕の練習量を支えたと思います。

大学時代の仙台は、ほんわかしておつとりした東北の人柄で、良い感じの眞面目さを感じていました。反対に

関西はチヤキチヤキで、昨日知り合ったおばちゃんとでも、十年来の付き合いみたいな感覚ですよね。(笑) よくも悪くも、僕は良い風に思っています。

藤尾さんのご出身は大阪ですか。

藤尾 大阪生まれの大坂育ちです。下町の天満では、散髪屋の亭主が店の前に立っていて、学校帰りの私を呼び止め、よく髪を切ってくれました。切り

ながら、「今日は何の勉強したんや」と会話をしています。でも、途中でお客さんが来るから、いつも中途半端なカットで終わるんですよ。後ろだけとか。(笑) 帰る時に「おい、出世払いやぞ」とか言いながら。そんなことや、近くの銭湯では近所のおじさんが「背中流して」とか。よくよく考えたら、うちの店が仕入している八百屋の大将やったとか。とにかく大阪らしい親しみがあるけれども、その中に何か一つの越えてはいけないものがある。そういう環境で育ちました。

だから僕のイズムの、「厳しいけれど温かい」という想いは、そういう環境からきていると思います。

インタビュー 金本イズムというのを教えていただけますか。

金本 イズムというか、自分の信念はたくさんありますが、良い意味で「頑固であり素直である」という強い信念をもつていて、とにかく約束は守る、やり遂げる、という想いと、人の話にちゃんと耳を傾けることができる素直さ、この相反する二つがうまくかみ合っていけば良いのではないかと僕は思いました。

藤尾 私は商売人に生まれて商売人で育つて、自分の考え方やイズムは、その環境の中で培つたと思っています。

商売としては基本的にはノーは言わない。ノーは言わないというのは、商売人にとって非常に大事なことだと思いません。「これを願い出来ますか」と言われて「それは出来ません」と言うのではなく、「ちょっとやってみましょうか。」と言い、絶対ノーを言わない。お客様にストレスを感じさせないということは、非常に大事なことです。

例えば、料理によつては、お持ち帰り出来ないとかあっても、お客様の要望にはきつと応える。ただ、そこに言葉の商品も添えて「すみません、今日中にお召し上がりください。」とか、



そういうことを言えるかが大事です。

僕は基本的に商売の原点というのは「ノーを言わない」ということだと思いません。だから何でも注文を受けたらノーを言わない。まだ店を数軒しかやつていない時、「明後日に3000個のお弁当が出来るか」と言わされました

が、「そんなん出来るに決まつてますが

な」と言う。(笑) 「何時にどこ持つていつらよろしいんか」という風に、出来る限り応える。数軒しかなくて人がいなくとも、ちょっと知恵を使って、3000個やつたら、300個作れる店はどこがあるので、10軒くらいに

中学の時に、市場に行って多少「まけて」と言うと、「まかれへん、まかれへん」と言われ。「大根1本ちょうど」と言うと「100円」と言われて、「80円になりませんか」と聞いたら「そんな、無理や無理や、出来へん出来へん」と言われ、「そんだら分かった。な



らほうれん草ちょうどだい」と言つて、何か持つて帰つてた。値段で出来なかつたら商品でもらうとか、そういうのは染みついているような感じです。(笑)

一同 (笑)

インタビュー 商売を極められた社長をどう思われますか。

金本 昔ながらの大坂商人という感じですね。(笑) 天下の台所ですからね。

インタビュー 最後に、弊社で働くメンバーにメッセージをいただけますでしょうか。

金本 仕事をする上で、例えば誰かのためにとか、会社のため、上司のため、お店のためにとか、そういう気持ちを持つてると、仕事自体が楽しくなるのではないかと思います。自分が何かを頑張つて誰かに喜んでもらうというのは、時代とは関係ないと思っています。今僕も野球以外のスポーツやオリンピックを見ていて、若い選手が

「コーチのためにメダルを取りたかつた」とか「チームのために」という言葉を聞くと、僕はすごく嬉しいです。

去年ある携帯電話の会社の表彰式に

行つたのですが、若い女性の方が営業ナンバーワンで一番携帯電話を卖ったらしいのですが、その方の優勝インタビューで、「店長にいつもよく仕事を教えてもらつていて、この店長をチーンでナンバーワンにしたい」という思いがあつたから頑張りました」みたいな事を言つっていました。

20代前半くらいの方でしたが、すごく良い言葉を聞かせてもらいました。スポーツも仕事も根本にはそのような気持ちがあつた方が良いのかなと思います。

フジオフードシステムの皆さんも、是非誰かのためにという想いを持って、頑張つていただきたいと思います。藤尾社長のためにとか。(笑)

一同 (笑)

藤尾 何のために働いて、誰のために生きるのか。そこには、人の役に立つという意味があると思います。だからどんな時でも、一人でも自分のことを見つめてくれる人がいれば、その人のために一所懸命やる、そうすれば辛いことも乗り切れると思います。

藤尾 本日は限られた時間の中で非常に内容の濃いお話をしていただき、本当にありがとうございました。